

特集

地域で生きる ―ローカルでいこう！―

多くの人たちの生活の価値観を変えたと言われる東日本大震災から1年がたった。震災直後は、首都圏でも当たり前と言われる日常の生活が送れない状況になった。電車は止まり、津波による工場被害や物流ストップによる日常食料品などの欠品や買い占めによる品切れ、原発事故による計画停電など、今までの「当たり前」の生活が当たり前におくことができなくなった瞬間であった。同時に、原発事故の放射能が及ぼした被害の深刻さは、原子力エネルギーから持続可能な再生エネルギーへの転換を多くの人に望ませ、節電など省エネへの動きを加速させた。

被災地での支援においても、あらためて絆やコミュニティの大切さが共有され、着実に、等身大で暮らしていける生活が真の幸せであると多くの人が体感させられたのではないだろうか。

今までの価値観で持続可能な社会は目指せないのではと漠然と皆が感じ始めてはいるものの、その一方で1年という時間は、人びとが体験した記憶を薄らげ、再び右肩上がりの成長神話、消費経済への幻想を追い求める生活へ引きずりこもうとしているようにも感じられる。

こうしたことから、今号のテーマは、「地域で生きる ―ローカルでいこう！―」とし、それぞれの地域で震災以前からぶれることなく自分たちの「暮らす」、「生きる」ことにこだわって活動してきた人たちの実践を取り上げた。

都市部、農山漁村地に関係なく、地域にしっかりと根を下ろし、複合的なネットワークによる協同の力＝＜ローカルの力＞にあらためてスポットライトを当て、彼らの取組みや生活から「暮らす」とはなんなのか、「生きる」とは何なのかをあらためて考えてみたい。

地域で「暮らす」、「生きる」、そして「はたらく」ことに立脚した協同労働の立場からも、震災1年後の今、私たちの目指すべき価値観、生活観を再認識したいと考える。